

復活節第2主日（神のいつくしみの主日）

ヨハネ 20・19－31

2019.4.28

高円寺教会 9：30 ミサ

豊島治神父（多摩教会主任司祭）

先程自己紹介いたしましたでしたが、わたくしはこの教会出身でして、2004年9月にここで助祭叙階を受けて、早いもので14年目の司祭生活となってしまいました。でも、東京教区の司祭団の中では年齢が若い、下から5番目でありまして、まだまだ下っ端だと思っています。

わたしは1974年くらいに中野区の方に越してきて、そのまま高円寺教会の所属になりました。ちょうど青梅街道に都電が走っているところから、都バスに切り替わった頃で、このバスも清水操車場行きっていうのがあって、いつもバスで教会まで一本で来られたのを思い出していました。

その頃、小学校のころからここに通っていたんですが、第二次ベビーブーマーの一人ですので、たしか日曜学校一学年30何人かいて、初聖体は毎年30～40人が受けるというような時代だったので、今思えば、その頃の教会学校は大変だったんだろうなと思います。そして、侍者会というのが発足しておりまして、小学校4年生のときから、侍者になるべく、合宿もあり、非常に懇切丁寧な指導を長年にわたって戴きました。侍者は、ミサ全般の準備をする役目があります。祭具を用意したり、段取りを考えたり、当時3人いらした神父さんを上手に誘導できるようにするのが侍者の務めだというふうに学びました。ですから、復活祭を迎える、特に聖週間、聖なる三日間というのは非常に有意義な時期だったわけです。聖週間はいつも忙しかったです。親に「いつになったら帰ってくるの？」って怒られながら、11時くらいまで中学1年生が教会に入り浸っているというのが普通でありました。

そのときに、中学生にとってみればやはり厳しかったです。聖週間を準備し、洗礼者のための準備とかを侍者がしていて、非常に有意義な、重ねた重ねた準備の後に行われる復活徹夜祭のときに、侍者は疲れているわけですよ、そのときには。そのときにアレルヤ唱が歌われるわけです。復活徹夜祭のアレルヤ唱は、実に46日ぶりにアレルヤが歌われるわけです。その復活徹夜祭のアレルヤ唱が、今日答唱詩編で歌われている詩編118です。その中に、今日も歌われましたが、「家造りの捨てた石が隅の親石になった」という個所があります。

その箇所に侍者のリーダーの一人が涙したんですよ。ある意味こわいリーダーでありましたけれども、「このことばってなんていいことばなんだろう」というのが復活祭のときにすごく心に響いて。「ああ、このリーダーが泣いている」と思った経験があります。もともとこの 118 の詩編は、おそらくイエスが十字架に向かう前の晩に弟子たちと過ぎ越しの食事を用意して、その食事を記念したってということからすると、この詩編 118 をもしかしたらその場で唱えていたかもしれないって言われています。そうすると、この 118 の詩編というのは、もしかしたら、最後にお叫びになった「わが神、わが神、なぜわたしを見捨てられ給うたのか」というところの、その前には、もしかしたらこの 118 を唱えていたのかもしれない。このことばの意味、神様への信頼は裏切られない、わたしたちの神様への思いは裏切られないということから、最後の極みまでイエス様はそれを歌っていたと言えるかもしれない。

今日の福音で、イエスがトマスに「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである」と言うのが有名な個所ですが、今日捉えてみたいのは、「家の戸に鍵をかけていた」という個所です。家の戸に鍵がかけてあったというと、わたしの日曜学校時代の思い出では、みんなが食堂に集まっていて、家の扉、玄関の鍵を締めていたっていう感じです。「ユダヤ人を恐れて」と書かれているから、きっとそういうふうにイメージするのはたやすいと思います。

しかし、今日の後半のところ、「みな鍵がかけてあったのに」、「みな」と書かれています。そうすると、鍵は複数形だったんじゃないかっていうふうに思われます。いや、実際複数形で書かれているわけです。

わたしが中野に住んでいたときに、公団住宅というところに住んでいて、そこはワン・フロアーに 13 戸があって、それぞれに部屋があって、鍵を締めて入っている。昭和時代はその鍵は開けっ放しにされていて、子どもたちの往来が盛んにある第二次ベビーブームでしたけれど、今はかっちり鍵を掛けます。もしかすると、この弟子たちにこういう雰囲気があったんじゃないか。ユダヤ人たちに恐れていた弟子たち、同時に、弟子同士も不信感と疑心感と罪深さとちょっと恥ずかしさがあって、鍵を締めていたっていうのがあり得たんじゃないか。「おまえ、イエス様と一緒にいるって言ったのに、裏切ったじゃないか」、「おまえはあそこで最後まで付き従って行って言ったのに、いなかったじゃないか。偉そうなこと言って、なんだよ、おまえは」。そういうふうに言われるのが怖くてそれぞれの部屋の鍵を締めていたんじゃないかというふうに。

そうすると、この弟子たちの怖さとか寂しさは、べつにイエス様が、お師匠さんが捕らえられていなくなったってことだけじゃなくって、弟子同士の間不信感に対してもあったんじゃないか。そうすると、八方塞がりの苦しみを持っていたんだろうと思います。

そういうふうを考えるならば、弟子は、ただ単にこのイエス様が捕らえられた、こんどはわたしが殺されるかもしれないというだけでなく、同時に、周りの人がみんな敵だっというこの苦しさとか寂しさとか孤独の中にいた。そこにイエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」とおっしゃった。「あなたはもう一度やり直せるんだよ。今こういうふうには引きずって来たけれども、その引きずりは今もう断ち切って次に行くんだよ。なにそこまで後ろ向きになっているんだ」、そういうふうにはイエス様はポンポンと触って示してくれたとうふうには思っても良いのかもしれない。

今日の第一朗読の使徒言行録は「信じた人々の群れは」とあります。その信じた人々の一致という、よくわたしたちの町内会とかで使う友情とか、あるいは「ひとつになろう」という目的ではなくって、神様が「あなたは今、大事なことをして良いんだよ」という神様の祝福と、「あなたは大丈夫だ」という復活のキリストのことばにおける一致だっということが分かります。

そして、今日の第二朗読は「イエスがメシアであると信じる人は皆、神から生まれたものです」と言います。そうすると、神を愛する人は、神から生まれたすべての人を愛するのだ、すべての人間に対して豊かに公平に神様はそれを導いてくださっている。だから復活を祝ったわたしたちは、ルカの言う「信じた」ということに希望があって、そしてそこに生きる基盤があるんだ、そして、その「信じた」というのは、復活したキリスト、永遠に復活して存在するキリストとして、今わたしたちを力づけてくれている、祝福を与えてくださっている、「よしよし」と言ってくれている、そういう促しを与えてくれているんだと思います。

そう考えると、復活をお祝いするわたしたちに、わたしたちの耳元で、そしてわたしたちの心で、そしてわたしたち全体の中でそれをずうっとイエス様が響いてくださっている。そういうことならば、わたしたちは生きていくうえで、嘆き悲しむってことに引っ張られるのではなくて、「そうだ、もう一回やれるんだ、イエス様に触れれば」、そういうふうにはわたしたちは教会に向きたいと思ひ、ご聖体に触れたいと思ひます。